

現代ドイツ語の文法現象へのアプローチ

瀬川 真由美

1. 問題提起

多くの言語分析と同様に、現代ドイツ語の文法現象についても、その分析あるいは説明に関して様々な方法のアプローチが試みられている。特に、現代ドイツ語に特殊性が認められると言われている再帰代名詞を用いた表現は、多くの研究者の興味の対象であり続けている。それにもかかわらずその全体を説明可能にするためには、未だに十分で明確な結論に達されていない。ヨーロッパ系言語の中で、統語的・意味的にその多様性と種類の豊富さに際立っている現代ドイツ語の再帰代名詞を用いた表現を解明するためにふさわしいアプローチ方法を見出す作業が必要である。

本稿では、現代ドイツ語における再帰代名詞を用いた表現(以下、再帰的構造と呼ぶ)の多様性を分析するためのふさわしいアプローチ方法を見出すために、統語論と意味論のインターフェース、類型論の観点、語彙機能文法によるアプローチのありようを概観する。なお、概観の対象は最も意味的多様性に富み論考の多くが扱っている *accusative reflexive pronoun* に関する記述に絞る。また、各例文のグロスと日本語による対訳文は付記した。

2. 統語論と意味論のインターフェース

本章では再帰的構造を中間態としてアプローチした Steinbach(2002)を概観する。

2.1 再帰的構造の下位分類

現代ドイツ語の再帰代名詞を用いた表現には、再帰代名詞が前置詞格で出現する場合を除くと、概ね以下の4種類に分類される。

(1) Peter wäscht sich.

Peter-NOM washes reflexive-pronoun-ACC

ペーターは体を洗っている。

(2) Das Buch liest sich leicht.

the book-NOM reads reflexive-pronoun-ACC easily

その本は読みやすい。

(3) Die Tür öffnet sich.

the door-NOM opens reflexive-pronoun-ACC

ドアが開く。

(4) Peter erkältet sich.

Peter-NOM catches.a.cold reflexive-pronoun-ACC

ペーターがカゼをひく。

上記の4種類の再帰的構造はすべて中間態と考えられ、さらに例文(1)の再帰代名詞は semantic argument (以下、意味的項と呼ぶ)であるが、例文

(2)(3)(4)に出現している再帰代名詞は意味的項とは呼べない。

2.2 valency reduction

例文(2)のような middle constructions (以下, 中間構造と呼ぶ)は基底にある動詞の意味を著しく変えることはない。例文(2)と例文(5)の対格の再帰代名詞は, valency reduction(項の減少)を示す形態的統語的な middle marker と分析され得る。

- (5) Das Brot schneidet sich leicht.
the bread-NOM cuts RP-ACC easily
そのパンは切りやすい。

項の減少の点で受動態と中間構造は同様であるが, 中間構造は能動態と同様に統語的に他動詞である。また, 受動態は特別な出来事に言及し得るが, 中間構造は属性を含意している。

対格の再帰代名詞は例文(2)と例文(5)の中間構造と同様に, 例文(3)のような anticausatives においても項の減少を示す。

- (3) Die Tür öffnet sich.
the door-NOM opens RP-ACC

ただし, 中間構造と異なり, anticausatives では特殊な状況を記述する。

2.3 impersonal or intransitive middle constructions

3人称中性の代名詞 es を文法的主語に持つ impersonal or intransitive middle constructions(以下, 非人称中間構造と呼ぶ)がある。用いられる動

詞は例文(6)の典型的な *intransitive unergative verbs*, あるいは例文(7)の *ergative or unaccusative verbs* である。

(6) Nun schläft es sich doch ein bisschen besser.
now sleeps it RP PARTICLE a little better
今なら少し良く眠れる。

(7) Bei hellem Licht schläft sich's nicht so gut ein.
with bright light fall.asleep RP.it not that well PARTICLE
明るい光のもとではあまりよく眠りこめない。

これらの例文が示すように中間構造の形成においては、動詞語彙の観点から、少なくとも一つの項を減少させる機能があると言える。項の減少の際、減少する項は必ずしも外項である必要はない。また、時制についても現在形である必要はない。動詞語彙により、中間構造を形成できない種類もある。例えば *wissen(know)*, *können(be able)*, *heissen(be called)*, *abstammen (be descended)*などである。

2.4 中間構造内の再帰代名詞の特徴

中間構造内の再帰代名詞が θ -role を受け取る過程は、英語に較べ複雑になっている。ドイツ語の中間構造の再帰代名詞の中で、 θ -role を受け取ることなく目的語の位置にある *accusative reflexive pronoun* のみが、中間態のマーカーとみなされ得る。

再帰代名詞が *argument* なのか *non-argument* なのかは、操作テストによって確認される。中間構造内の再帰代名詞は *non-argument* であることが、次の操作テストがすべて非適格文であることによって確定される。

Coordination

Narrow focus

Focus particles

Contrastive negation

Substitution

Questioning

Fronting

一方, Argument である再帰代名詞は上記の操作テストでの適格性が異なる。

Steinbach(2002)では, 中間構造と anticausative はドイツ語においてはその派生に関して統語的に区別することはできず, 意味的に内包された項が飽和するか減少するかで判別されると結論付けられている。

3. 類型論

本章では類型論の観点からの middle voice (中間態) にアプローチした Kemmer (1993)を概観する。

3.1 reflexive marker (再帰標識)

多くの言語に, Agent と Patient が同一の指示対象を示す reflexive marker (再帰標識)が存在している。ドイツ語のように middle marker (中間態標識)と reflexive marker (再帰標識)が形態的に一致している言語がある。このような言語には one-form middle system が認められる。このタイプの言語が最も多く観察される。

- (8) Peter sieht sich. (reflexive meaning)

Peter-NOM sees RP-ACC

ペーターは自分を見る。

- (9) Peter fürchtet sich. (emotion middle)

Peter-NOM is.afraid RP-ACC

また、**reflexive marker**(再帰標識)と**middle marker**(中間態標識)が動詞の接辞として出現する言語がある。このような言語においては**reflexive marker**(再帰標識)よりも**middle marker**(中間態標識)の方が音韻の実体が小さいことが特徴になっている。これらの言語を **two-form languages** と呼ぶ。

3.2 reflexive marker の分布の違い

reflexive marker(再帰標識)の分布についての考察では、すべての人称と数において**reflexive marker**(再帰標識)がつく言語と3人称においてのみ**reflexive marker**(再帰標識)がある言語に大別される。

3.3 中間態の内容

ドイツ語の中間態の文が担う意味的内容は以下のように分類される。また多くの言語の中間態が、この基準により分類され得る。

Grooming actions

- (10) sich anziehen

RP-ACC dress

服を着る

Change in body posture actions

(11) sich hinlegen

RP-ACC lay.down

横になる

Nontranslational motion actions

(12) sich verbeugen

RP-ACC bow

腰をかがめる

これらの分析については出来事に関する2項の弁別の程度によってスカラーが認められる。

多くの言語に共通してみられる中間態は感情表現である。

Emotion middle

(13) sich fürchten

RP-ACC frighten

怖がる

Emotive speech actions

(14) sich beschweren

RP-ACC complain

訴える

Kemmer(1993)では主に再帰代名詞に一定の意味を認める再帰的表現を中心に論じている。また、通時的に再帰代名詞の担う役割が変遷してきたことを示唆している。その分析の基準は動詞語彙に重きが置かれている。

4. LFG

本章では、LFG の観点からの再帰的構造にアプローチした Kelling (2005)を概観する。

intransitivity hypothesis は2種類に分かれる。すなわち再帰的構造が unaccusative なのか unergative なのかに大別される。Intransitive predicate's argument が unaccusative は内項, unergative は外項であり、それが基準になっている。LFG では LDG と同様に、統語的な区別は意味的に再解釈される。unaccusative は theme/patient を持ち、unergative は agent を持つ。LMT では再帰的に用いられた動詞の項構造の各要素は agent は[-o], theme/patient は[-r]とマークされる。

本論文では、再帰代名詞が要素としてどのようにとらえられるのか、再帰的構造の項構造がいかなるものか、を考察している。

4.1 transitive / intransitive

(15) Max rasiert sich.

Max-NOM shaves RP

マックスが髭を剃る。

(3) Die Tür öffnet sich.

the door-NOM opens RP

ドアが開く。

(16) Max schämt sich.

Max-NOM shames RP

マックスは恥じている。

現代ドイツ語の再帰的構造内の再帰代名詞には、その再帰的構造の文が担う意味とそこに用いられる動詞の統語的意味的特性との連関によって、スカラーが認められる。すなわち、動詞の統語的項とみなす *transitivity hypothesis* なのか、動詞の統語的項とはみなさない *intransitive hypothesis* なのか、いくつかの再帰的構造においては統語的項とみなす、というスカラーである。

例文(15)の再帰代名詞は *thematic direct object* である一方、例文(3)と例文(16)の再帰代名詞は *expletive* であり *non-thematic direct object* である。さらに、例文(3)の場合は、動詞の語彙概念構造の *agent role* を抑制する語彙規則を適用して得られるため、その再帰代名詞である *expletive* は *decausativization* のマーカーとも言える。

4.2 LCSとDCPによる分析

項構造に文法関係がどのように割り当てられるかには、個別言語の枠を超えて多くの言語で共通して観察されるパターンが認められる。それを *the Default Causativization Paradigm(DCP)* と呼んでいる。以下のようにまとめられる。

(17) Causativisation of an intransitive verb

LCS	Agent	Causee
a-structure	x	y
f-structure	SUBJ	OBJ

(18) Causativization of a transitive verb

LCS	Agent	Causee	Theme
-----	-------	--------	-------

a-structure	x	y	z
f-structure	SUBJ	OBJ _θ	OBJ

(19) Causativization of a ditransitive verb

LCS	Agent	Causee	Theme	Beneficiary
a-structure	x	y	z	w
f-structure	SUBJ	OBL _θ	OBJ	OBJ _θ

DCP では基礎動詞のヴァレンツに依存して、常に causer は SUBJ に割り当てられ、causee は OBJ かあるいは Relational Hierarchy において文法的機能が下位のものに割り当てられる。

(20) Relational Hierarchy

SUBJ > OBJ > OBJ_θ > OBL_θ

biclausal construction の場合は次のように割り当てられる。

(21) The biclausal causative construction

LCS	Agent	Causee	Caused action
a-structure	x	y	p
f-structure	SUBJ	OBJ	XCOMP

4.3 非人称受動と構成要素の文法的機能

(22) Gestern wurde getanzt.

yesterday was danced

昨日はダンスが行われた。

(23) Jetzt wird sich gewaschen.

now is oneself washed

今、体を洗いなさい。

(24) a. Jetzt wird der Brief geschrieben.

now is the letter-NOM written

今、手紙が書かれている。

b. *Jetzt wird den Brief geschrieben.

now is the letter-ACC written

受動化操作は2重に行われている。まず、能動態の動詞の SUBJ が削除され、次に能動態の動詞の OBJ が受動構造で SUBJ に格上げされる。類型論では、一段階目の操作、すなわち能動態の動詞の SUBJ が削除されることは義務的であるが、二段階目の操作、すなわち能動態の動詞の OBJ が受動構造で SUBJ に格上げされることは任意であると観察されている。

ドイツ語の他動詞の受動化では OBJ の格上げは義務的であり、そのため例文(24a)と例文(24b)の非対称性が生じる。例文(23)については OBJ の格上げは適用されない。

4.4 再帰代名詞の位置

LFG では構成要素間の先行関係についての一般化が f-precedence という概念によってなされている。この場合の先行順位は f-structure のレベルでの順位である。ドイツ語では(25)のようなルールがある。これは subject と object の代名詞を、助動詞と本動詞の間にあるいわゆる Mittelfeld(中域)で制約する規則である。

(25) SUBJ < rOBJ

(26) weil er sie plötzlich geöffnet hat
because he.SUBJ it.OBJ suddenly opened has

(27) weil sie sich plötzlich geöffnet hat
because it.SUBJ RP.OBJ suddenly opened has

(28) *weil sie er plötzlich geöffnet hat
because it.OBJ he.SUBJ suddenly opened has

(29) *weil sich sie plötzlich geöffnet hat
because RP.OBJ it.SUBJ suddenly opened has

ドイツ語の文法機能の線条的順序に関するデータに基づき、再帰代名詞に対応する非再帰代名詞の構成要素と同様の規則に従っていることが、再帰代名詞が統語論では目的語として扱われる根拠になっている。再帰代名詞が non-argument であるとしたら、位置などについて別の規則を設定しなければならない。

4.5 再帰的用法は他動詞

(30) Er hat sich vor dem Hund erschrocken.
he has RP of the dog frightened
彼は犬に驚いた。

例文(30)にあるようにドイツ語の他動詞構造は助動詞に **haben(have)** を必ず選択する。

- (31) die sich öffnende Tür
the RP opening door
開くドア
- (32) die geöffnete Tür
the opened door
開かれたドア
- (33) *die sich geöffnete Tür
the RP opened door
- (34) ein die Tür öffnender Mann
a the door opening man
ドアを開けている男性

再帰的に用いられている動詞について、例文(31)の現在分詞と例文(32)の過去分詞の用法は他動詞と同様の振る舞いをしている。例文(31)の再帰代名詞は、例文(34)の目的語と同様に現在分詞とともに保持されている。例文(33)の過去分詞構造においては、再帰代名詞は表層には現れない。この非対称性は *intransitive hypothesis* では説明がつかない。しかし *transitive hypothesis* で例文(33)で再帰代名詞が出現しない理由が次のように説明が可能である。受動化の動詞と同じように過去分詞がひとつの **OBJ** を下位範疇化することはない。

4.6 LMT での再帰的用法の動詞

典型的な transitive/causative verbs についての LCS のマッピングパターンと LMT による表示は以下のようになる。

(35)	LCS	agent	theme
	a-structure	<x	y>
		shave/open [-o]	[-r]
	f-structure	SUBJ	OBJ

再帰的用法の動詞についての LCS のマッピングパターンと LMT による表示は以下のようになる。

(36)	LCS	agent _i	theme _i
	a-structure	<x _i	y _i >
		shave oneself [-o]	[-r]
	f-structure	SUBJ _j	OBJ _j =REFL

次の操作を decausative operation と呼ぶ。

(37) DECAUSATIVE OPERATION: agent → 0

この操作により agent argument は抑制され, theme argument は SUBJ にマッピングされる。英語は以下のように表示される。

(38)	LCS	theme
	a-structure	<y>
		open(intr.) [-r]
	f-structure	SUBJ

ドイツ語の non-thematic (expletive) argument は(39)に示すように、再帰的 OBJ として出現する。[-r]は意味役割をまったく持たない、制限のない統語的機能を表示している。

(39)	LCS	theme _i	
	a-structure	<y _i >	_ _i
	open	[-r]	[-r]
	f-structure	SUBJ _j	OBJ _j =REFL _{EXPL}

ドイツ語には例文(40)と例文(41)の es に見られるように expletive subjects や expletive objects があることを LFG では考慮している。

(40) … weil es keine Hoffnung gibt.

because it no hope gives

希望はないのだから。

(41) Sie hat es Eilig.

she has it quickly

彼女は急いでいる。

Expletives は動詞の持つ thematic argument の外に置かれる。

Kelling(2005)では、ドイツ語の再帰代名詞が目的語であることを論証し、それがどのようにマッピングされて、具体的な文形式に出現するのかを分析した。

5. まとめ

本稿では、現代ドイツ語における再帰的構造に関する3点の論考、すなわち統語論と意味論のインターフェース、類型論の観点、語彙機能文法によるアプローチのありようを概観した。類型論は再帰的構造の担う文意味に重きをおき、多くの言語の再帰的構造を比較分析している。その際にも、基礎動詞について統語的意味的観点から考察を加えている。統語論と意味論のインターフェース、語彙機能文法によるアプローチにおいては、基礎動詞からどのように再帰的構造が派生あるいは生成されるのかを、統語的に検証している。統語的検証は基礎動詞が能動態で要求する要素を考慮に入れており、それがどのような統語的操作によって項を減少させるのか、その項がどのような意味役割を担っているのか、あるいは意味的項ではないのか、その項が文法的にどのように機能しているのか、を中心に再帰的構造を分析している。同じゲルマン系言語であっても、再帰的構造を形成する動詞は、英語とドイツ語で異なる振る舞いをする。そのため統語的操作の記述も英語とドイツ語では異なる。ドイツ語の再帰的構造の統語的意味的多様性への分析のためには、動詞語彙と再帰的構造を適切に記述する意味的アプローチと、基礎動詞から再帰的構造を派生させる規則を的確に記述する統語的観点が不可欠であると思われる。

Abbreviations

ACC	accusative case
NOM	nominative case
RP	reflexive pronoun
REFL	reflexive

引用文献

Kelling, Carmen. 2005. Are reflexive constructions transitive or intransitive? Evidence from German and Romance. Proceedings of the LFG05 Conference.:CSLI Publications.

<http://csli-publications.stanford.edu/>

Kemmer, Suzanne. 1993. The Middle Voice. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Steinbach, Markus. 2002. Middle Voice. Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins Publishing Company.

参考文献

Engelberg, Stefan. 2000. Verben, Ereignisse und das Lexicon. Tübingen: Niemeyer Verlag.

Kibort, Anna. 2007. Extending the Applicability of Lexical Mapping Theory. Proceedings of the LFG07 Conference.:CSLI Publications.

<http://csli-publications.stanford.edu/>

